

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の3年目)

1. 研究課題

チベットにおけるコミュニケーションツールの研究—書簡文化の歴史的変遷と現代的意義

A study of communication tools in Tibet: Continuity, transition, and expandability of the letter culture in Tibet

2. 研究代表者氏名

池田 巧

IKEDA, Takumi

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(3年目)

4. 研究目的

チベットにおける書簡には、インド仏教由来の韻文で綴ったスタイルによる手紙と散文で書かれた手紙の二種類がある。このうち、第二の手紙群には、高僧の手になる手紙や政治文書における手紙などのほか、寺院への支援物資に添えた手紙、古代チベット帝国期の通達文書など様々な書簡が含まれる。これらのチベット語書簡は、書かれた時代や目的のみならず、書き手の立場や社会背景、書体や書式スタイルに至る諸要素において異なる性質を持っている。本研究では、様々な性質を持つ書簡を通覧し分析することで、チベットにおける書簡の類型化に取り組み、その意義を検証する。また、現代社会には書簡のみならずeメールやSNS等のコミュニケーションツールが存在する。これらのツールと書簡との関連や相違を明らかにし、現代社会における書簡の位置付けについて考察する。歴史の当事者たちが綴った文字資料であり、正しく扱えば有益な史料となる書簡を分野横断的かつ通時的に比較・分析し、現代のツールと付き合わせることで、コミュニケーションツールの一媒体である書簡の役割を歴史的文脈で再検証し、複眼的視点からチベット社会を見直すことが本研究の主たる目的である。

There are two types of letters in Tibetan civilization: letters as literature written in verse based on the Indian Buddhistic style and letters as correspondences written in prose. The second group includes various sub-types of letters written by priests, political documents, letters attached to relief supplies to temples, etc. Characteristics of these letters vary in the period, purpose and the writer's social background, which represents style and format. This study will examine the historical significance of letters in Tibet by classifying and analyzing letters

belonging to various periods. This study will also discuss the position of letters in modern Tibetan society by comparing the characteristics of letters to alternative communication tools such as e-mail and SNS. Through these attempts, this study will examine the role of letters as a medium of communication in a historical context and review Tibetan society from a multifaceted perspective.

5. 本年度の研究実施状況

チベット語の書簡について、班員の間で基本的な知識と認識を共有するべくさまざまな書簡文書の紹介を含む報告を聞き、分野横断的な討論と検討を行なった。書簡に加えて多様な文書の書式についての研究報告もあり、それぞれのテーマごとに検討を加え、書かれた文書の地域的、時代的な諸特徴についての理解を深めた。チベット語の書簡の書式と内容についての資料のひとつに、青木文教が請来したチベット語の書簡の書き方についてのマニュアルの写本がある。この資料は、これまでに公式に出版されたことがなく、その内容についてもほとんど知られていない。この写本を撮影した写真版に基づき、会読を行うための校本を作成するべくチベット文字の入力を依頼し、デジタルテキストの作成を継続した。また定例の研究集会を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、班員各位の先端的な研究成果の報告のほか、ゲストスピーカーから最新の研究報告を聞く機会を得た。

6. 本年度の研究実施内容

- 2024.4.20 18世紀後半における清朝・チベット間の書簡の往来とその変容 発表者 小松原 ゆり 明治大学（非常勤講師）
- 2024.5.25 「お悔やみ」の伝え方—あるいはチベット研究における「コミュニケーションツール」の変容をめぐって 発表者 小西賢吾 人と社会の未来研究院
- 2024.6.29 On the Origins of the Tibetan Imperial Clan and the Two Cultures of Early Tibet 発表者 Christopher I. Beckwith Indiana University
- 2024.7.20 チベットの土地安堵文書テンツィク (gtan tshigs) : その書式と機能について 発表者 大川謙作 日本大学
- 2024.11.15 第10回チベット学情報交換会「台湾カンギュル=ラプラン(bka' gyur bla brang, 甘珠精舎)」について 発表者 池尻陽子 関西大学文学部
- 2024.11.16 第72回日本チベット学会大会 中国の経済開発と少数民族の言語政策に関する考察：チベットを対象にした先行研究のレビューを中心に 発表者 サムジュツォム 同志社大学大学院 「ブータンのボン」再考—シペー・ギェルモ信仰を手がかりに— 小西賢吾 人と社会の未来研究院
- 2024.12.21 電信・郵便・ラジオ—運輸・通信革命とチベット（1900—1951） 発表者 小林亮介 九州大学 ダージリンにおける近現代チベット史関連旧跡の調査報告 小松原ゆり 明治大学（非常勤講師）

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

池田巧、稲葉穰、中西竜也

学内

海老原志穂(白眉センター・文学部)、井内真帆(白眉センター・文学部)、小西賢吾(人と社会の未来研究院)、西田愛

学外

星泉(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、根本裕史(広島大学大学院文学研究科)、山本達也(静岡大学人文社会科学部)、小林亮介(九州大学比較社会文化研究院)、岩田啓介(筑波大学人文社会系)、長岡慶(東京大学・日本学術振興会)、岩尾一史(龍谷大学文学部)、大川謙作(日本大学文理学部)、別所裕介(駒沢大学総合教育研究部)、山本明志(大阪国際大学経営経済学部)、小野田俊蔵(佛教大学)、三宅伸一郎(大谷大学)、小松原ゆり(明治大学文学部)、村上大輔(駿河台大学現代文化学部)、加納和雄(駒澤大学仏教学部)、池尻陽子(関西大学文学部)、旗手瞳(龍谷大学・日本学術振興会)、ガザンジェ(東洋文庫・日本学術振興会)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	5	0	0	0	0	11	0	0	0	0
京大内 (人文研を除く) (内女性)	2	2	1	0	0	0	7	5	0	0	0
国立大学 (内女性)	6	7	0	0	0	1	13	0	0	0	3
公立大学 (内女性)	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
私立大学 (内女性)	9	11	1	0	0	1	31	3	0	0	4
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	1	1	1	0	0	0	3	3	0	0	0
民間機関 (内女性)	0	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	0
外国機関 (内女性)	0	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	0
その他 ※ (内女性)	2	2	2	0	0	0	6	6	0	0	0
計	22	28	5	0	0	3	71	17	0	0	11
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											
Indiana University, 青海民族大学											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	15		8	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	『アジア人物史：第12巻(20~21世紀)』集英社	1	2024.4	ダライ・ラマ 14 世とその家族の群像：20 世紀のチベット	小林亮介
2	『アジア・アフリカ言語文化研究』108 号	1	2024.9	チベット旧社会における領民獲得競争：農務局改革の帰結とミボー制度	大川謙作
3	Cahier d'Extrême-Asie 33	9	2024.12	The Foundations of Tibetan Studies in Japan: The Pioneering Efforts of Cataloging the Otani	ONODA Shunzō (小野田俊蔵)

				and Tohoku Collections	
4				Japanese Research on Postimperial Tibet: Medieval and Buddhist History	IUCHI Maho (井内真帆)
5				The Rising Sun of the Great Perfection: The Japanese Reception of Dzogchen, a Philosophical and Contemplative Tradition of Tibetan Buddhism	Marc-Henri DEROCHE
6				Old Tibetan Studies in Japan: 1920s-2020s	IWAO Kazushi (岩尾一史)
7				Historical Studies in Japan on the Qing Dynasty Relationship to Tibet	KOMATSUBARA Yuri (小松原ゆり)
8				Contemporary Research Trends in Early Twentieth-Century Japan-Tibet Relations	KOBAYASHI Ryōsuke (小林亮介)
9				Studies of Modern Tibet in Japan: Anthropology, Social History, and Political Science	ŌKAWA Kensaku (大川謙作)
10				The Historical Development of Tibetan Linguistics in Japan	EBIHARA Shiho (海老原志穂)

11				Aspects of the Acquisition of the Tibetan Language (Literary and Colloquial) by Japanese Researchers from the Late Nineteenth to Early Twenty-First Century	IKEDA Takumi (池田巧)
12	『東洋文化研究所紀要』第186冊	1	2024.12	ミジェ (mi brje) 考：チベット旧社会における「領民交換制度」の実態をめぐって	大川謙作
13	『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第21号	1	2025.3	チベットの諺とその展開	小野田俊蔵
14	八木百合子（編）『モノから見た宗教の世界』春風社	1	2025.3	蓄積されるモノと聖性のありかーチベットの宗教実践の事例から	小西賢吾
15	『比較論理学研究』22	1	2025.3	不在の知覚	根本裕史
16	『比較論理学研究』22	1	2025.3	Phywa pa chos kyi seng ge's Theory of med dgag and ma yin dgag	NEMOTO Hiroshi (根本裕史)
17	『比較論理学研究』22	1	2025.3	シトゥ『三十頌註』研究：独立助詞と音声論	班青東周・根本裕史
18	『アジア・アフリカ言語文化研究 別冊』(5)	1	2025.3	チベット・ヒマラヤ地域における乳製品およびチーズの多様性を探る：語彙研究からのアプローチ	星泉

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	『アムド・チベット語の発音と会話（改訂版）』	海老原志穂	2024.7	東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所	
2	『チベット・ヒマラヤ 牧畜文化の諸相』（ア ジア・アフリカ言語文 化研究 別冊 第5号）	海老原志穂・岩田啓 介・星泉	2025.3	東京外国語大学 アジア・アフリカ 言語文化研究所	

12. 博士学位を取得した学生の数

1（学外1）

13. 研究成果公表計画および今後の展開等

最終年度を迎え、研究成果報告書の論集を刊行することを目標に、研究報告を積み重ね、批判的な検討を加えてきた。班員並びにゲストの報告者は、これまでに研究班の例会で行なった報告をもとに文章化して論文の執筆準備を進めている。執筆者は研究報告の文章化を行い、研究班では論集のフォーマットを定めて刊行スケジュールを検討し、編集作業に着手する。